

野田武則 釜石市長インタビュー

ふとうふくつ

不撓不屈の精神で、まちを復興していきたい

岩手県釜石市は、古くから「鉄と魚の町」と称され、産業と漁業が共存した町として発展してきた。昨年3月、巨津波に襲われ、約1100名にのぼる死者・行方不明者を出し、ふるさとの景色は一変、全てが無に帰してしまった。しかし、避難・救済活動において、次世代や他の地域への参考となる数々のドラマも、ここ釜石で生まれている。震災から1年。これからの防災のあり方、未来へ向けたまちづくりについて、野田市長にお話を伺った。



津波で被害を受けた震災後の釜石市の状況。



野田武則(のだ たけのり) 昭和28年岩手県釜石市生まれ。大学卒業後、釜石市消防団、甲東幼稚園園長を経て平成15年から岩手県議員に。19年釜石市長に就任

現在の釜石市街地の様子。1階は津波によって破壊されたままの建物がまだ多いが、店舗も徐々に回復中。信号などのインフラは復旧している。



釜石の奇跡

三陸地方には、「津波でんでんこ」という言い伝えがある。「でんでんこ」とは「でんでんばらばら」という意味で、「自分の命は自分で守れ」という沿岸地域の防災の考え方を表している言葉だ。それを体現するよ

うな出来事があった。「釜石市では、市内児童・生徒の99.8%にあたる約3000人が津波から逃げて無事だったというエピソードがあり、『釜石の奇跡』と呼ばれています。これは、釜石の誇りです」

3月11日、巨大な地震が発生。そのとき、大槌湾沿岸部に位置する、釜石東中学校の生徒はいち早く避難所へ向け走り出した。それを見て隣接する鶴住居小学校3階に集まっていた児童たちも校庭に駆け出し、指定避難場所である「ごさいしょの里」という施設まで避難した。しかし、施設の裏山が崩れて危険と判断した子ども達は、さらに高台にある介護福祉施設へ避難。津波が校舎をまるごと飲み込み、ごさいしょの里へ迫るなか、バラバラになりながらもさらに高台へと走り続けた。小学

生の手を引き、途中、合流した鶴住居保育園の園児たちとともに国道沿いの石材店までたどり着いた。さらに道路の法面を駆け上がって約570人が難を逃れたのである。

「その道路が、3月5日に開通したばかりの釜石山田道路です。そこを通ったトラックに、安全な避難所まで運んでもらえたそうです。もし、道路が開通していなければ、車が通ることもなく雪の中で一夜を過ごすなくてはならなかったかもしれず、幸運と言えるだろう。」

「釜石の奇跡」は、防災教育の一つの成果である。

「まず、①想定にとらわれない。②どんなときでも最善をつくす。③避難率先者になる。この3つが釜石で教えてきた、津波から命を守るための3原則です。これからは設備を整えるだけでなく、避難経路や災害意識を高める教育が、より一層大切になると思います。これを50年、100年後までどのように伝えていけるかが大事です」

また、今回の震災を振り返って、道路の重要性も感じたという。震災後、海沿いの国道45号は不通になり、内陸からの物資運搬には横断道の国道



子ども達が避難し、最終的にたどり着いたのが開通したばかりの釜石山田道路。奥の道路が国道45号で、その間に石材店も見える。



釜石東中学校、鷗住居小学校及び鷗住居保育園の子ども達は、自らの判断でございしよの里、介護福祉施設、石材店、釜石山田道路へとより安全な場所を目指し、避難した。“釜石の奇跡”はイギリスやドイツを始め世界でも報じられ、話題となった。



現在の鷗住居小学校(右)と釜石東中学校(線路側から撮影)。



「当市には21の集落があります。震災後、住民アンケートを行ったところ、以前住んでいた場所に戻りたいという市民が圧倒的です。そんな声を胸に復興まちづくり委員会を発足して復興計画を進めています。産業のない所にまちの再生はありません。今の世代だけではなく、次世代にも誇れるまちには何が必要か？ 少子化・

誰もが暮らしたい 活力あるまちへ

釜石市の市街地を見渡すと、がれきこそ撤去されたものの1階が損失し、鉄骨がむき出しになった家や商店が連なっている。今後のまちづくりについてこう語る。

「我々は災害対策本部を釜石駅近くのシープラザに設置し、被災者の救援活動を行いました。くしの歯作戦で横断道の復旧が早く行われ、内陸の遠野市を通じて、全国からの支援物資が日々、定量的に届き大変ありがたかったです」

283号やそのバイパスである仙人峠道路が利用されるが、それも一時寸断された。

「昨年、東日本大震災検証委員会を立ちあげました。被害をできるだけ少なくする、減災の考え方でのみまちづくりが必要。ハード面での備えと、防災教育などソフト面での多重防御が大切だと考えています」

「たえば、海が見える場所に防災センターを置くこと。これは災害や津波を目視しながら伝えることに大きな意味があるのです。直接津波を目の当たりにしていない市民は推定の中にあり、避難してもらうためには目を覚まさせるような切迫感が必要だからです。」

「遠野市は沿岸と内陸の交易拠点として、釜石市に物資供給や人的派遣など多くの支援を行った。官民一体となって展開されたこの活動は今、災害救援のモデルケースとして全国から注目され、新聞などで広く報じられている。」

「我々は災害対策本部を釜石駅近くのシープラザに設置し、被災者の救援活動を行いました。くしの歯作戦で横断道の復旧が早く行われ、内陸の遠野市を通じて、全国からの支援物資が日々、定量的に届き大変ありがたかったです」

高齢化が進む中、雇用問題も含め、若い人たちにとって魅力的なまちとは何か、というところを検討しています。たとえば、太陽光や蓄電池などを利用して災害時にも停電することなく電気を使える持続可能なスマートコミュニティなど、先駆的なまちづくりを目指しています」

「、撓まず屈せず」の精神。この心意気が釜石の人の中に残っているんです。それを市民のみなさんと共有して、いいまちを作っていきたい。」

「市長自身も釜石市の出身。魅力は、町の歴史である。約150年前、日本で始めて洋式高炉による鉄の製造に成功し、近代製鉄発祥の地として隆盛を続ける。良港としても知られ、明治5年に日本初の海図も作成された。しかし明治29年、昭和8年の大津波の襲来、昭和20年の大空襲と、港湾とまちは壊滅的な被害を受けてきた。しかし、その度に立ち上がり、再建を果たしてしてきたのである。」

「昨年、東日本大震災検証委員会を立ちあげました。被害をできるだけ少なくする、減災の考え方でのみまちづくりが必要。ハード面での備えと、防災教育などソフト面での多重防御が大切だと考えています」

「我々は災害対策本部を釜石駅近くのシープラザに設置し、被災者の救援活動を行いました。くしの歯作戦で横断道の復旧が早く行われ、内陸の遠野市を通じて、全国からの支援物資が日々、定量的に届き大変ありがたかったです」



朝焼けに映える釜石港。釜石市は復興へ向けて大きく舵を切った。